

熱帯 バイオマス社会

調査報告他

Jelalong川流域社会の共有林
— プラオとは何か

祖田 亮次、竹内 やよい、石川 登 1

1980年代後半の Jelalong ウォーターウェイ

Logie Seman 7

関連活動記録

2013年8月-9月メンバー動向 10

プロジェクトHP 紹介 13

プロジェクト参加メンバー紹介 14

Binyo川 Rh.Iraiの前にて
2013年5月 (写真: 鮫島 弘光)



Jelalong 川流域社会の共有林 —プラオとは何か

祖田 亮次 (大阪市立大学 文学研究科)
竹内 やよい (国立環境学研究所)
石川 登 (京都大学 東南アジア研究所)

1. プラオとは何か

プラオとは、イバン語およびマレー語で、文字通りには、海に浮かぶ「島」を指す。しかし、イバン語では、焼畑後の休閑林が広がる中で、島のように点在する分厚い森を指す言葉としても用いられる。イバンの集落の範囲内には、多くの場合、プラオと呼ばれる森が残されており、それは、水源地として保護されていたり、ロングハウス建設時の建材調達の間として利用されたりする。

このプラオは、周辺の焼畑休閑林と比較して、一般にバイオマス量が豊富で生物の種多様性が高い。原生林にのみ見られる種も存在するため、焼畑休閑林の植生回復に必要な種子の供給源としても重要な役割を果たしているのではないかと考えられる。

このプラオとその周辺の植生調査と、現地住民によるプラオ利用・土地利用に関する調査を組み合わせることで、森林資源の社会的・文化的な価値を評価するための重要な契機を提供できると思われる。

ただ、人類学や言語学などを中心にしたイバン研究の豊富な蓄積があるにもかかわらず、このプラオという土地／森林のあり方や利用形態について、人文社会科学的な観点から研究したものは意外に少なく、プラオとは何かという基礎的情報さえ十分であるとはいえない。たとえば、『イバン研究辞典』(The encyclopedia of Iban studies)では、プラオについて次のような解説が施されている。

「プラオとは、木の島、籐の島、あるいは聖なる樹林などと呼ぶもので、各ロングハウス・コミュニティにとって欠かせない保護地(reserves)とみなされている。コミュニティの成員は、家や船を建造するための木材を、その森からとってくるのができたとし、鉄製の釘や留め金などの金物類が手に入る以前は、構造物を結び合わせるための籐や蔓もそこから調達していた」(「聖地」、「農業」の項目も参照のこと)。

また、上記以外にも、精霊や妖怪が住み、人が入ってはいけない *pulau mali* (禁忌の森) と呼ばれるプラ

オもあるという(『イバン研究辞典』の「聖地」の項目)。このような形で、「保護地」や「立ち入り禁止」といったものと結び付けられて語られることが多いため、プラオには保存林や聖地といった、重厚なる森林地区というイメージが付きまとう。

しかし、実際には、プラオというのは、森林を森林として残しておくべきであるという意志とは別に、時にはそうした意志を上回る開発インセンティブが強く働く場合もある。さらに言えば、「残すべき」「保存すべき」という部分を強調するよりも、「残った(あるいは、たまたま残っていた)」森という程度の意味で捉える方が適切な場合も多い。その意味では、サラワク森林公社の Lucy 氏が言う「残存林 (remnant forest)」という表現の方が、的を射ているかもしれない。

2013年8月の調査では、Kebulu の Rh.Aying の古老に対してプラオの履歴や概要について聞き取りを行うと同時に、Jelalong 川流域における、他のいくつかの集落でも、若干の聞き取りを行った。そこで、プラオの概念や利用法にも多様なバリエーションがあることが分かったので、それらを簡単に報告しておきたい。

以下では、Rh.Aying (イバン集落)、Rh.Jusong (ブナン／イバン混成集落)、Rh.Malek (イバン集落)、Rh.Aban (イバン集落) などで得られた、プラオに関する情報について、その概要を記述した上で、とくに Rh.Aying におけるプラオの具体的な履歴等を紹介したい。

2. プラオの種類

プラオの概念的なバリエーションという点でいえば、いくつかの集落で異なる見解が得られた。

Rh.Jusong や Rh.Malek、Rh.Aying などでは、プラオというのは、原生林のみを指すわけではない。かつて焼畑や伐採等で攪乱を受けた森であっても、それらが数十年かけて十分に植生回復しており、周辺の若い焼畑休閑林と明らかに異なる様相を示している場合は、プラオと呼ぶこともあるという。重要なことは、そのプラオから家屋や船を作るための建材を調達できる程度に植生回復しているかどうか、という点であろうと思われる。

一方、Rh.Aban では、村のプラオは水源地として利用している場所の一か所のみであるという。彼らが言うには、プラオというのは原生林 *kampong* であるべきで、集落

内には、他に十分に植生回復した焼畑休閑林はあるが、それらはあくまでも *pengerang* (古い焼畑休閑林) であって、プラオにはならないという。なぜ、彼らが原生林にこだわるのかは現時点では不明であるが、いずれにせよ、村によってプラオと呼ぶべき対象が、若干異なっていることが分かる。

村の共有林としてのプラオは、原則として村の公共（水源地確保やロングハウス建設の建材調達など）のための利用に限られ、個人的に利用したい場合（たとえば船を作る材料を調達したい場合など）は、事前の村落会議で承認される必要がある。これらのルールが破られ、それが発覚した場合には、その違反の度合いに応じたペナルティを支払うことになる。

一方、上述のような村の共有林としてのプラオとは別に、個人（世帯）のプラオもあると、村人たちは言う。「個人のプラオ」に関して、その土地（森）をどう利用するかは、その個人の裁量にゆだねられる。この個人のプラオは、Jelalong 地域では *pulau umai* と呼ばれ、強いて訳すなら「焼畑地（に隣接した）プラオ」とでもいえようか。

たとえば、ある個人が陸稲焼畑を行うために、数年にわたって隣接する森を順に開いていったとする。それらの土地の占有権は、そこにあった森を切り拓いた彼のものになると同時に、その帯状に続いた土地に隣接している

森は、まだ開墾していないとしても、翌年以降に彼が使うであろうという集落内の相互認識のもとに、その個人の利用権が優先される森になるという。しかし、その森を切り拓かずに、翌年の焼畑地は別の休閑林を利用すれば、そこは原生林の状態を保った個人のプラオとなりうる。

このプラオでは、籐の採集を行うこともあれば、価値の高い原木を伐採して売ることもある。また、果樹や籐を植えて半栽培することもある。その一方で、焼畑地として必要になった場合や、まとまった量の商品作物を導入する場合などに、森を切り拓くこともありうるという。

プラオの大きさについてはまちまちだが、村のプラオが数十エーカー以上の面積を持つことが多いのに対して、個人のプラオは数エーカーのみの場合がほとんどであるという。

3. Rh.Aying のプラオ

Rh.Aying には4つの共有林としてのプラオがある。それぞれに名前がついていて、Pulau Kerapa、Pulau Sengloi、Bukit Pantu、Bukit Naga と呼んでいる。以下、それぞれのプラオについて概説する。

1) Pulau Kerapa

ここは、河川から近い湿地林で、Pulau Paya と呼ぶこともある。雨の多い時期には冠水することもあるそうだ。

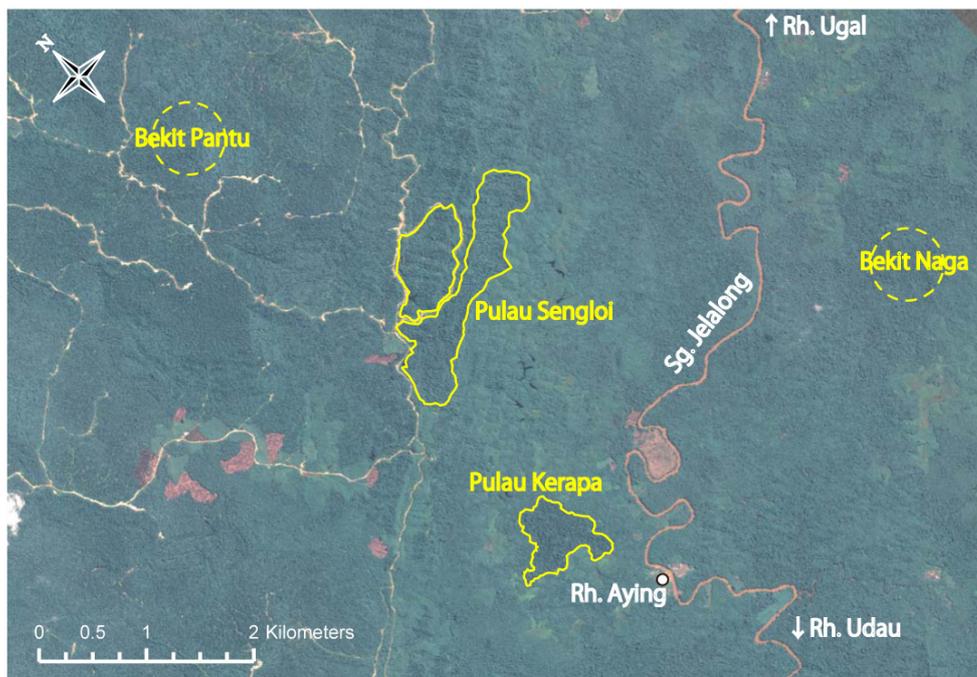


図1: Rh. Aying の集落共有の4つのプラオ
Pulau Sengloi には一度盗伐が入っており、その際に作られた伐採道が真ん中に走っている。
Bukit Pantu, Bukit Naga の正確な位置は要確認。

ロングハウスからは、北方向へ約 0.5km の距離にある。推定面積は約 3.5ha である。ロングハウスから徒歩で 15 分程度で到着する。

Pulau Kerapa の周辺は、彼らがこの場所に移住して来る以前、つまり 1950 年代から Hock Seng Sawmill 社が伐採を行っていた。Hock Seng の伐採方法は、線路を敷いて *kuda-kuda* (人力) で引っ張る方式だった。誰が働いていたのかはよく分からないが、Mukah や Dalat あたりからムラナウを連れてきて使っていたらしい。このあたりのパイ・スガンを使っていたのではなく、「本物の」ムラナウ人を使っていたという。

彼らが Kebulu に移住してきたとき、Hock Seng 社の当時のボスであった Robert Kiu に、これ以上、木を切らないでほしいと頼んだという。Robert Kiu はこの村 (ロングハウス) にも頻繁に遊びに来て宿泊するなど、村人たちと話ができる人であったという。その時に、村人たちの要望を受け入れる形で、伐採せずに残されたのが、今の Pulau Kerapa である。

2002 年にロングハウスが火事になった時は、その後の再建のために、この Pulau Kerapa で木材を調達した。そのためか、プラオとしては大径木が少ない。

2) Pulau Sengloi

Pulau Sengloi は水源地として利用しており、村では Pulau Paip と呼ばれることが多い。ロングハウスから北へ約 3km の位置にあり、推定面積は約 12.5ha である。徒歩で行く場合は 2 時間程度、ボートを利用する場合は、1 時間半程度で到着する。

ここは 1968 年に衛生局 (Medical Department) がやってきて、ロングハウスまでパイプを引いてからプラオになった。それまでは、パイプなど必要なく、Jelalong 川の水を飲んでいたという。このパイプは、昔は PBC (グレーのビニール管) を使っていたが、2010 年に再び衛生局がやってきて、黒いパイプに交換した。このプラオは水源地となっているので、ロングハウスを建設する場合であっても、このプラオから木を切り出すことは禁止している。これはロングハウス内のルールである。

3) Bukit Pantu

Bukit Pantu は急な崖になっているところがあって、稲作には向かない土地である。逆に言えば、アクセスが悪いので利用されずに森のまま残っていたともいえる。場所はロングハウスから北方向に約 5km の位置にある。

村人 (前村長) の話によると、1983 年にこのプラオの

木を使いたくて、クチンの森林局から伐採の許可を得ようとしたという。というのも、ここはすでに Hock Seng 社の商業伐採コンセッションのエリアに入っていたので、自分たちの村の領域 (*pemakai menoa*) とはいえ、勝手に木を切ることができなかったからである。森林局の回答は、Bukit Pantu には 3 つの伐採ブロックがあって、その木を切ることはできないというものだった。1 ブロックは 80 チェイン四方であり、約 2.56 平方 km の面積である。その伐採エリアの地図や証書は土地測量局に保管されているが、村人にはそのコピーは渡されなかったという。

クチンの森林局に行ったときは、当時の森林大臣の Nor Tahir に会ってプラオ利用の申請をした。その時は、新しいロングハウス建設のための木材を調達したいと思って申請したが、結局認められなかった。その代りに、政府の援助で、製材所から無償で木材が運び込まれたので、その木材を利用して新しいロングハウスを建設した。

その後、Bukit Pantu における Hock Seng 社の伐採権はキャンセルされ (詳しい年代は不明)、ロングハウスの住民も使いたければ、使えるようになった。ここもプラオではあるが、何度か伐採会社が無断で木を切ったりしている。一度は会社を咎めて、ペナルティとして 60,000 リンギット払わせたが、別の会社が林道を作っていた時は、咎めようと思ったけど、連中は道路づくりを途中で放り出し



写真 1: Pulau Sengloi の外観



写真 2: Pulau Sengloi で採集した籐



写真 3: Pulau Sengloi での植生調査プロット

て逃げてしまった。当時は、カメラも携帯電話もなかったので、証拠を残したり即座に通報したりできなかったという。現在では、Bukit Pantu の北西隣はほとんどアブラヤシになってしまっている。

4) Bukit Naga

Bukit Naga は、Jelalong 川を挟んでロングハウスとは反対側にある。ロングハウスからの距離は東に 3.5km である。雨の多い時期には、Jelalong 川支流の Separi Besar 川をさかのぼり、近辺までアクセスすることが可能であるようだ。また、Bukit Naga への行き方は村の古老たちしか知らないことから、Rh. Aying の人たちの利用頻度はかなり低いと思われる。Bukit Naga も大きなプラオだったが、今では小さくなったという。Rh. Malek の人たちが Bukit Naga で勝手に稲作を始めてしまったので、森がかなり失われたというのである。その時、Rh. Malek の人たちを咎めはしたが、それがもとで喧嘩をしたというわけではなかったという。

Bukit Naga も、こちら側 (Rh. Aying 側) が急斜面になっていてアプローチが難しく、Rh. Aying の人にとっては稲作には向かない土地であった。ここは Separi Besar 川の上流域で、Separi Besar 川を境にして、南西側が Rh. Aying の領域で、北側が Rh. Ugal の領域になっているという。いずれのロングハウスでも Bukit Naga と呼んでいる。Rh. Ugal 側の Bukit Naga は、すでに伐採会社のコンセッションに含まれているようで、近いうちに伐採が始まるという話もある。

なお、この Bukit Naga については、Rh. Malek におい

ても若干の話を聞いたが、Rh. Malek の住民の主張では、本来、彼らの領域であって、Rh. Aying の人々が勘違いしているだけだという。また、この領域をめぐる葛藤については、何度も裁判沙汰になっているというが、詳細は不明である。

5) その他

Mekapan 川の最上流域には、Bukit Rian という森があったが、そこはすでに伐採会社に切られてしまったという。その森が残っていれば、プラオとして認知されていた可能性は高い。

4. まとめ

以上、Jelalong 川全体の情報を交えつつ、Rh. Aying のプラオ (共有林としてのプラオ) について、やや詳しくみてきたが、傾向として次の 3 点が指摘できるであろう。

第 1 に、プラオはたまたまプラオになった場合が多いということである。たとえば、Pulau Kerapa に関して言えば、村人としてはロングハウスの近くに建材調達できる森が欲しかったが、Hock Seng 社の企業活動によって河畔林の大部分が伐採されており、当時まだ伐採が本格的に始まっていなかった場所を残してもらうように交渉したという。また、Pulau Sengloi に関して、衛生局によって水源地指定されて初めてプラオとして意識されるようになったという。同様のことは、Rh. Jusong や Rh. Aban など、ほかのロングハウスでも聞かれた。一方、Bukit Pantu と Bukit Naga は、こう配が急でアプローチが難しいために、農業利用されることなく現在まで天然林が残存することになったようである。

2 点目として指摘できるのは、プラオは永続的に「保護」されるとは限らず、むしろ容易に拓かれやすいという点である。住民たちがロングハウスの建設等にプラオの木材を利用するという以外に、企業によってプラオの木が合法・非合法に伐採されることもあれば、近隣ロングハウス住民によって焼畑に利用されることもある。また、ロングハウス住民自身によって、プラオが切り拓かれることもある。これは、Rh. Jusong の例であるが、近年彼らは Kebulu 川沿いのロングハウスから、伐採道路沿いの出作り小屋へと、生活の場を移動させている。それはアブラヤシ栽培の導入や、プランテーション企業の土地開発に対する牽制という意味もあったが、いずれにせよ、彼らが現在アブラヤシを植えている場所は、以前はプラオだった場所だという。そのプラオの土地を村の住民たち

で均等に分割して、商品作物栽培へと急速に転換しているのである。Rh.Aying においても、アブラヤシ栽培が浸透した場合、同様のことが起こらないとも限らない。

第3の傾向としていえるのは、外部社会との関係性の中でプラオが意識されることが多いという点である。Pulau Kerapa も Pulau Sengloi も、企業や政府との関係性の中でプラオの設定がなされた。Bukit Naga は、Rh.Aying の人々にとって利用価値があるとは思えないが、Rh.Ugal や Rh.Malek といった近隣集落との境界が強く意識される場所である。Bukit Pantu についても Hock Seng 社や森林局との関係性が強く表れていると言えるかもしれない。

Bukit Pantu に関して言えば、1983年にこの場所の木材を利用しようとしたというが、実はその意図がよく分からない。住民は、かつてはプラオまでいかずともロングハウ

スの建材調達はできたと言い、プラオの存在意義が希薄だったと思わせる発言をしているにも関わらず、1983年にこのプラオの利用を申請しているのは、おそらくは企業活動の牽制という意味もあったのではないだろうかと推察できる。

以上、Rh.Aying を中心に、Jelalong 川流域のプラオについて概説したが、まだ分かっていない部分も多い。とくに、プナンやイバンなど複数の民族が混雑している地域の歴史的事情がプラオの設定にどう影響したのか、近年のプランテーション開発の流れの中で、プラオの存続・維持がどのように実現されるのか、個人のプラオと村のプラオとの関係はどのように変化しうるのか、といった点については、引き続き調査を行っていく必要があると思われる。



写真4: プンバン (bemban) で作ったゴザ



写真6: 籐で作った籠を売る女性



写真5: 籐で作ったお盆。5種類の籐が使われている。



写真7: Pulau Sengloi でのヤシの採集



写真 8: ヤシ科植物の幹（芯の部分）で作ったスープ



写真 9 Pulau Sengloi の植生調査プロット



写真 10: Pulau Sengloi の水源ダム

1980年代後半のJelalong ウォーターウェイ

Logie Seman (元マレーシア・サラワク森林局)

Jelalong 川の景観は全般的に言えば、低い丘陵地帯を背後に持ち、河畔林と泥炭地で構成されている。この流域社会はカヤン、ブナン、イバンのほか、少数の華人などから構成されており、各民族グループ間の婚姻関係もごく普通に見られる。1980年代後半の時点で、Jelalong 川流域には、支流の Kebulu 川沿いも含めて、14 のロングハウスが存在しており、下流域には3つの大きな貯木場があった。水道供給のような生活アメニティがないところなので、河川は、飲料用の取水、水浴び、洗濯などの場であった。当時は、棧橋のところに、「ハンギング・トイレ」(イバン語では *agu di tebing sungai* と呼ぶ) がたくさん見られた。各村に通じる道路はなかったので、河川は物資運輸路や農地へのアクセス手段、漁労の場として利用され、まさにウォーターウェイというべきものであった。



写真 1: Kemena川から見たBiutule市街



写真 2: Kemena川下流の橋



写真 3: Tubau下流のSamling Camp



写真 4 Tubau での宴会
Engkasuのイバン Lahap 氏(中央)、Rh.Anyiのカヤン Lasah 氏(右)の姿も見られる。

分水嶺、上流域、中流域ともに、木材資源に恵まれており、それらは商業的価値を持つものであった。猛烈な雨が降ると、Jelalong 川の両岸が洪水氾濫にみまわれるが、川岸の木を切って、筏で下流に運ぶためには、ちょうど良い機会となった。丸太の筏は、10馬力ほどの船外機付きロングボートを使って牽引することが多かった。乾季においても、若干の木材が伐採された。それらはチェーンソーで製材して、運搬しやすいサイズに整えられた。そして、河岸に持ち運ばれて、そこから外部へと売られていくことになった。丸太の筏はロングボートでけん引されて、下流の製材所に持ち込まれたが、チェーンソーで製材した木材は、発動機艇(ポンポン船)に載せられて下流へと運ばれていった。こうした河畔林での伐採は、村人たちにとっては、手っ取り早く現金が得られる方法で、彼らの主要な収入源にもなっていた。

河川流域社会にとって、漁労は、現在に至るまで、販売用としても自家消費用としても、非常に重要な活動である。イノシシやシカなどを主な対象とする狩猟や、



写真 5: 建設中のTubau の棧橋(1988年)



写真 7: 1989年Tubauで開催された世界森林デーで植樹をする Penhgulu Anyi氏



写真 6: 建設中のTubau の棧橋(1988年)



写真 8: 森林局職員の Tubau の宿舍

籐をはじめとする森林産物の採集なども、現地住民が行ってきた生業活動である。なかには、木材伐採キャンプで木を切る仕事をする者もいた。ほかにも、学校の専属ボート・ドライバーや、トラックのドライバー、伐採量計測員、筏乗り、その他のブルーカラーの仕事に就く者たちがいた。

ロングハウスの棧橋付近では、5馬力か10馬力、あるいは15馬力くらいの船外機を付けたロングボートを数多く見かけることができた。それらの船外機のほとんどは、ヤマハ製かマーキュリー製であった。ロングボートの「モーターゼーション」は、各世帯にとっては、外部世界との連絡手段や運輸交通の形態として、必要不可欠なものとなっていた。また、Jelalong川とTubau川との合流点に位置する小規模市場町Tubauで買い物をするにしても、船外機は重要であった。

上流地域の人々にとっては、Jelalong川を航行するのは困難かつ危険であった。というのも、木の切り株や、上から落ちてきた木の枝、その他の河床残存物などの

存在があったからである。雨季になると水量は増え、必然的に、技術の高いロングボート・ドライバーは、ボートを巧みに操ることができた。とくに、角度の急な蛇行部分などは腕の見せ所であった。雨季になると、時には、木材関係で儲かることもあった。

当時は、Jelalong川では荷船やタグボートが数多く往来し、貯木場から木材を運搬していた。そのころは、企業による木材伐採は、割り当て制度による量的制限を受けていなかったため、貯木場には大量の丸太が山積みになっていた。ハイパワー・エンジンのタグボートを使って、下流まで丸太を運ぶということもあった。客船用のエクスプレス・ボートはJelalong下流域のリンパン・ヒジャオの貯木場までしか運航していなかった。そこは、現在

の Rumah Wan Usin（カヤンのロングハウス）が建っているところである。

多くの人々が船外機やチェーンソーを必要とし、所有するようになったことで、新型機械も含めた各種機械や部品の修理メカニックをしていた Ah Lai という名の潮州華人などは、ほんの数年の間で金持ちになった。その当時、木材とその関連による収入効果によって、地元住民たちの所得も向上していたのである。

20 世紀以降のサラワクの集落を見ていると、河川は、集落やロングハウス、小規模市場町などが立地するための自然的特徴を強く持っていたといえる。Jelalong 川もその例外ではない。いくつかの高級商品を含む森林産物は、他のコミュニティとバーターで交換されており、そのことが、まだ道路のなかった時代の Jelalong 川で河川運輸を活発化させていた。今日でも、Jelalong 川は通信連絡と物資運輸の手段として使われている。



写真 9: 1980 年代末の Jelalong 川下流、後方にエクスプレス・ボートが見える。



写真 10: Rh.Anyi の古老の女性

著者：Logie Seman 翻訳：祖田亮次

関連活動記録

2013年8月-9月 メンバー動向

石川 登 (京都大学 東南アジア研究所)
加藤 裕美 (京都大学 東南アジア研究所)
Jason Hon
目代 邦安 (自然保護助成基金)
竹内 やよい (国立環境研究所)
鹿野 雄一 (九州大学 工学研究院)
Logie Seman
祖田 亮次 (大阪市立大学 文学研究科)

他
(文中敬称略)

2013年8月13日～: アブラヤシ小農調査ほか

加藤・祖田は8月13日に Bintulu 入りし、ビントウル・オフィスで打ち合わせを行ったうえで、14日からTubau 周辺の小農アブラヤシ栽培の調査を行った。具体的には、14～18日は Keresa 社周辺の Iban 集落で、小農世帯と都市居住者との経済的・社会的関係性を中心に聞き取りを行った。都市住民のアブラヤシ栽培への関与は非常に多様であり、農村-都市関係が複雑化していることが分かった。また、最近では、都市の華人商店主らが Iban 集落の土地やアブラヤシそのものを「貸借」する形で、農村地域のアブラヤシ栽培に参入しつつある実態が見られた。アブラヤシ小農調査の一環としての土地利用調査(予備調査)については、Jason Hon と共同で行った。土地利用図作製のための詳細調査は、2013年11月以降に実施予定である。

8月18日は、ビントウル・オフィスに戻ってデータの整理を行うと同時に、それまで Bintulu 各地で水質調査・魚類調査を行ってきた徳地・福島・鹿野・鮫島や、翌日から植生調査で Jelalong に行く竹内・Bibian (SFC スタッフ)らと情報交換を行った。

8月19～20日は、加藤・祖田の2名で、Miri-Bintulu Road 沿いのいくつかの集落と、Bakun Road 沿いの Kayan 集落、Kenyah 集落で若干の調査を行った。これは、Tubau 周辺の Iban 集落のアブラヤシ栽培を相対化するのが目的であった。ほかの地域や民族集団でも、アブラヤシ栽培は始まっており、Tubau 周辺の Iban が特殊事例でないことは明らかだが、地域や民族によって、栽培の開始時期や、栽培方法にばらつきがあることも分かった。今後の比較検討が必要になるものと思われる。Kenyah の集落では、コメやキャッサバとの複数年次にわたっての混裁も見られ、インドネ

シアのプカランガンの土地利用との比較可能性も見いだされた。

8月20日の夕刻は、ビントウル・オフィスでデータ整理を行うと同時に、動物胃石の流通に関する調査を行っている奥野・市川哲らと情報を交換した。



写真 1: Kg.Sambop (Kenyah 集落) に向かって Belaga 川を渡る吊り橋



写真 2: Kg.Sambop (Kenyah 集落)

2013年8月21日～: 河川地形調査ほか

加藤は21日から数日間、Tatau 周辺で Lugat の親族ネットワークや言語使用状況に関する調査を行い、その後 Belaga / Kakus に移動して、Sihan 集落での人類学的調査を実施した(9月3日まで)。

祖田は8月21日に Miri に入って目代と合流し、Baram 川の Long Ekan 周辺、Rajang 川の Sibulung 周辺、Sadong 川の Buloh 地区周辺での河川調査を行った。2013年3月に設置した河岸モニタリング用カメラのデータを回収し、バッテリー交換を行うと同時に、いくつかの地点で地形測量も行った。3～7月の

撮影期間中は乾季にあたり、住民の説明によると、今年には特に乾燥していたとのことで、河川水量の増減については、カメラ映像でも大きな変化は見られなかったが、部分的には水位変化と地形変化の関係性が記録できていた。Sadong 川、Kuching での調査は、Logie Seman（元・森林局／河川局スタッフ）の協力を得た。目代・祖田は、25日に Kuching 近郊での地形観察を行ったあと、目代は帰国、祖田は Bintulu に向かった。



写真 3: 河岸モニタリング用カメラの設置 (Kemena 川)



写真 4: Rh.AyingのPulau Kerapa (植生調査のプロット候補地)

2013年8月25日～: 集落移動・生業変化調査ほか

25日の夜に、石川・祖田が Bintulu 入りし、Daniel Chew・鮫島と打ち合わせを行った。26日朝には、Kuching から Jason が合流した。26～27日は、石川・Jason・祖田で Jelalong 川の Kebulu にある Rh.Aying を訪問し、すでに現地でも調査を進めていた竹内・鹿野・Bibian (SFC スタッフ) らと合流した。竹内・Bibian の設定した植生調査のプロットを視察したうえで、ロングハウス住民に *pulau* (残存林) の履歴や土地利用についての聞き取り調査を行い、*pulau* の概念や利用方法に多様なバリエーションがあることを確認した。

この間、Daniel は単独で Bintulu ～ Tatau を往復しつつ、かつての主要な華人トレーダーやその関係者などを訪問し、20世紀後半以降の Kemena 川や Tatau 川流域の森林産物交易の実態と変化についての聞き取り調査を行った。

28日から、鹿野・Jason は Ulu Anap へと向かい、最上流域において、数日間の魚類調査を行った。石川・祖田は、28日は Bintulu に滞在し、データ整理を兼ねた休息日とした。29日には Kuching から Logie が合流して翌日以降の調査打ち合わせを行ったうえで、30日から9月1日まで、陸路で Jelalong 川上流を移動しつつ聞き取り調査を行った。多くの住民が、川沿いのロングハウスから、伐採道路沿いの *langkau* (出作り小屋) へと生活・生業の中心を移していることを鑑みて、その現状や背景を調べることが目的であった。移動の背景には、生活の利便性確保 や、アブラヤシ栽培の導入、土地の権利主張といった、さまざまな理由があることが分かったが、土地の境界設定や小農－企業関係については詳細不明の部分も多く、継続的調査が必要と思われる。

9月2日は、Bintulu 在住の Jelalong 出身者に聞き取りを行ったほか、土地法に詳しい関係者に話を聞くなど、Bintulu の都市部で活動した。3日はピントウル・オフィスでデータ整理・NL 原稿執筆などを行った。

2013年9月4日～

4日にKuchingからRashid・Jayl・今井が合流した。4日以降の数日間で、この3名と石川による調査が行われた。具体的には、Rh.Resa、Rh.Assan、Kpg. Yohなど、いくつかのPenan集落やPunan集落を訪問して、民族混淆状況に関する現地調査を実施したほか、Rh.JulaihiやKpg. Penan Batu 10などの集落から、村長や古老たちをピントウル・オフィスに招いて、聞き取りを行った。

Logieと祖田は、4日午後にKuchingに行き、各種地図を購入したり、関係者・機関を訪問したりするなど、補足的な調査活動を行った。祖田は9月5日に帰路についた。



写真 5: Rh.Aying での記念撮影



写真 6: Penan の出作り小屋での生業調査

本プロジェクトのホームページのご紹介

<http://biomassociety.org>

東南アジア熱帯域における
プランテーション型バイオマス社会の
総合的研究

News・お知らせ 目的 参加メンバーリスト 調査・研究 内容 調査結果 報告 リンク

ニューズレター-日本語版第8号

News・お知らせ 調査結果 報告

2012/06/08 [第27回アブラヤシ研究会のお知らせ](#)

2012/05/23 [米国立バイオマス作成の文献データベースの
ご紹介](#)

2012/05/23 [アブラヤシ研究会主催セッションのご案内
於：東南アジア学会 2012年6月2日
〔Sun〕](#)

2012/05/21 [アブラヤシ研究会（5月26日）のお知らせ](#)

2012/05/10 [2012年6月7日（木）異分野研究会 総会の
お知らせ](#)

お問い合わせ

京都大学東南アジア研究所
Center for Southeast Asian Studies Kyoto University
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿波町 46
Tel/Fax : 075-753-7338

Copyright(c) 2012 Center for Southeast Asian Studies. All Rights Reserved.

当プロジェクトのホームページを開設しております。

- ・ メンバーによる調査報告
- ・ 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ・ ニュースレターのバックナンバー（英語版もあります）
- ・ 最新の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバルヒストリー	政策研究大学院大学
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社 (JANUS)
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	京都大学 地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	京都大学 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野 雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内 やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代 邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：

(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomassociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://biomassociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀 (基盤S事務局)

Sarawak Planted Forest 社のアカシアプランテーション内にある
Binyo-Penyilam 保護区。泥炭湿地林が広がっている。
2013年5月 (写真: 鮫島 弘光)

